

本居宣長と和歌

山木 友美¹

0．はじめに

1．まことの歌・いつはりの歌

(1) 宣長の考える和歌のありかた

(2) いつはりの歌

2．和歌と共感

(1) 心を晴らすということ

(2) 和歌の表現と共感

3．おわりに

0．はじめに

江戸時代の国学者である本居宣長は、国学・文学評論以外にも和歌についての作品をいくつか残している。

宣長は自身の歌論において、真の情から生じた和歌を良い作品であるとして評価しており、心に思ったことや感じたことを、ありのままに和歌に読むことが大切であるとしている。しかし、同時に言語表現としての和歌というものがあり、文をなした和歌、つまり詞（ことば）をととのえ表現が工夫された和歌についても宣長は同じように評価している。「ありのままに詠む」ことと、「文をなす」こと、この2つは相反することのように感じる。宣長はこれらをどのように考え、何を基準にして、よい歌である「真の歌」と悪い歌である「いつはりの歌」を区別しているのだろうか。また、思いをありのままに表現するのではなく詞をととのえ、表現することが必要とされるのか。

今回はこれらについて、主に『排蘆小船』と『石上私叔言』の2つのテキストを用いて考えることとする。

¹ 富山市立図書館 司書

1. まことの歌・いつはりの歌

(1) 宣長の考える和歌のありかた

宣長は『排蘆小船』において、「たゞ心に思ふことをいふより外なし。」(『排蘆』p.12)²として、和歌は自分の心情を表現するためのものであると考えている。そして、自分の心にまかせてありのままに詠むことが和歌の本来のありかたであるとしている。

また、宣長は、実情(まことのこころ)にしたがって、自分の心情をありのままに詠むことを第一としているが、それと同時に言葉の芸術としての和歌についても評価している。そのうえで、「よい和歌を詠みたい」という思いもまた実情であるとし、和歌を詠む際に自身の思いを「嬉しい」、「悲しい」といった単純な言葉で表現するのではなく、表現の工夫をしたり、詞をととのえたりすることを肯定していることが以下の部分からわかる。

「思ふ心をよみあらはすが本然也。その歌のよきやうにとするも、又歌よむ人の実情也。」(『排蘆』p.14)

「況や歌はほどよくへうしおもしろくよくよまむとするゆへ、我実の心とたがふことはあるべき也。そのたがふ所もすなはち実情也。其故は、心には悪心あれども、善心の歌をよまむと思ふて、よむ歌はいつはりなれども、その善心をよまむと思ふ心に、いつはりはない也。すなはち実情也。たとへば花をみて、さのみおもしろからねど、歌のならひなれば随分面白く思ふやうによむ。面白と云ふは偽りなれど、面白きやうによまむと思ふ心は実情也。しかれば歌と云ふものは、みな実情より出づる也。よくよまむとするも実情也。よくよまむとおもへど、よくよめば実情をうしなふとて、わるけれどありのまゝによむ、これよくよまむと思ふ心にたがふて偽りなり。されども、実情をうしなふ故に、ありのまゝによまむと思ふも、又実情也。」(『排蘆』p.14)

この部分で宣長は、自分の心情をありのまま詠もうとする思いと、実際に和歌を詠むときにより良い和歌を詠もうとする思いやその思いから詠まれた和歌についてとりあげ、2つの思いの両方ともが実情から出できた思いであるので、すべての歌は実情から詠まれているものだと語っている。

例えば、花をみた時に、そこまで深く感動を覚えていないとしても、和歌を詠むときの慣習にならい深い感動を表現しようとする。この時に和歌に詠まれた「面白し」という強い感情は実際の自分の思いとは完全には一致しない偽りのものである。しかし、慣習にならい「より良い和歌を詠もう」という思いは、実情から生じた素直な思いである。反対に、より良い和歌を

² 『排蘆小船・石上私淑言—宣長「物のあはれ」歌論—』本居宣長著、子安宣邦校注、岩波書店、2003。以下、『排蘆小船』からの引用は本テキストによる。以下に引用する場合は『排蘆』と略記し、ページ数を併記する。

詠むために詞をととのえてしまうと、自身の心情をありのままに表現できないと考え、実情を大切にし、思いを装飾せずありのままの詞で詠もうとする行いもまた、実情から生じた素直な行いであると宣長は説明している。このように、自身の思いをありのままに詠もうとする行いも、より良い和歌を詠もうと詞や表現を工夫しようとする行いも、すべて実情から生じたものであり、偽りの物ではないと宣長は主張している。したがって、和歌はすべて実情から出できたものである、というのが宣長の考えである。

(2) いつはりの歌

では、宣長の考える「いつはりの歌」とはどのようなものなのだろうか。宣長は当時詠まれていた和歌について以下のように言及している。

「題をとりて、まづ情をもとめ、さて詞をとゝのふる也。このときにあたつて、情をもとむることも先にあれども、じたい情はもとむるものにはあらず。情は自然也。たゞもとむるは詞也。この故に詞をとゝのふるが第一也とは云ふ也。されども題をとりてよむなどは、もと情なし。題について情をもとめ、情もとめ得て、さてその情について詞をもとむる也。これ中古以来の詠歌のさま也。(中略)古の歌は情は自然なればもとむることなし、只詞をもとむ、中古以来の歌は、情辞ともにもとむ。これ古今のちがひ也。されば今の歌は、みな古人のまね也。まことの心より出づるにあらず。」(『俳蘆』p.58-59)

「されば今の人の和歌は、実情にあらず、みな題をもうけなどしてよむは、こしらへごとにし、いつはり也、その上言語事態ははなはだせばくすくなくして、思ふほどのことよまれず、されば無益のものにして、いにしへの誠の歌詠にあらずと思ふは、今の世のつたなき言語になれ、きたなき事態にならひて、上代のうはしきことをしらぬ下劣の人なり。」(『俳蘆』p74)

この部分から読みとれるように、古来から詠まれてきた和歌と、現在詠まれている和歌ではその詠みかたが変化してきていると宣長が考えていることがわかる。

古来から詠まれてきた和歌は、「もののあはれ」を知ることによって自分の中に感情が生じることをもとにして和歌を詠んでいる。このとき、和歌に詠まれる感情はあくまでも自分の中に自然と生じたものであり、作られたものではない。したがって、和歌を詠むときにはあくまでも自分に起きた感情をもとにして、その思いをより巧みに表現しようと詞をととのえている。したがって和歌を詠むためにそこに詠まれる思いを求める必要はない。

一方、『俳蘆小船』の書かれた当時の和歌の詠みかたというのは、まずあるテーマ(題目)を設け、そこから和歌に詠むための感情を創作し、そのうえで詞を選んでいく。したがって、和歌に詠まれている感情は和歌を詠むために求められたものであり、和歌を詠んでいる本人自身から生じた自然な感情、つまり実情から生じたものとは異なる。そのようにして詠まれてい

る和歌は過去に詠まれた作品の真似をしているだけであり、宣長の考える和歌の本質とは異なるものとなることがわかる。つまり、「いつはりの歌」というのは、自身の感情とは関係なくただ単に過去に詠まれた歌を模倣して、詞をととのえただけの作品のことであり、実情から生まれていない形だけの和歌のことである。

(3) まとめ

以上、宣長の考えている和歌のありかたと、それに反する「いつはりの歌」について考察してきた。宣長にとって、和歌で最も重要となるのが実情から生じた作品であるかどうかという点である。古来より詠まれてきた作品は、実情より自然に出てきた感情を表現するためのものであり、自分の思いと和歌に詠まれている感情の間に偽りがない。一方で、時代が進むにつれて、実情とは関係なくただ創造された思いをもとに詞をととのえた作品へと変化している。そしてそれは宣長にとっては実情から生まれた和歌とは違う「いつはりの歌」であると考えることができる。

では、なぜ宣長は和歌に実情から生じたありのままの感情を詠むことをよしとすると同時に、思いをただ単に表現するのではなく、詞をととのえ表現を工夫することを評価するのだろうか。それには「心を晴らすこと」と、「他者からの共感」という2点が関係している。次の章からは、この2点が歌を詠むことにどのように関わり、それによってなぜ詞をととのえ、表現の巧みな和歌が宣長に評価されているのかを考えていく。

2. 和歌と共感

(1) 心を晴らすということ

1章でも説明したように、人は実情から生じた自然な感情をありのままに表すことで和歌を詠んでいる。ではなぜそのようなやり方で人は和歌を詠む必要があるのか。これには宣長の考える人情、つまり実情における「心を晴らす」という心の動きが大いに関係している。

まず、宣長の考える実情には2つの心の動きが関係している。ひとつは「もののあはれ」を知る心の動きであり、もうひとつが「心を晴らす」心の動きである。この「心を晴らす」行為について、宣長は『石上私叔言』で以下のように言及している。

「しかるに、物のあはれを知る人は、あはれなる事にふれては、思はじとすれども、あはれと思はれてやみがたし。」(『石上(一)』p.304)³

³ 『新潮日本古典集成(第六〇回) 本居宣長集』、日野龍夫校注、新潮社、1983。本稿では3刷を使用。以下、『石上私叔言(巻一・巻二・巻三)』からの引用は本テキストによる。以下に引用する場合は『石上(一・二・三)』と略記し、ページ数を併記する。

「さてさやうにせんかたなく物のあはれなること深き時は、さてやみなんとすれども、心のうちにこめては、やみがたく忍びがたし。これを物のあはれに堪へぬとはいふなり。」(『石上(一)』 p.305)

このように「もののあはれに堪えぬ」状態になったとき、人は感情を表出させ、発散させることで心を晴らす。このとき、感情の強さによって発散の方法にはいくつかの種類があり、感情の強さによっても方法や満足度が異なるとされる。方法のひとつは、泣く・喜ぶといった方法である。例えば子どもに先立たれた親が悲しみにくれ泣くのも、心を晴らす心の動きである。もうひとつの方法として、自身の感情を他者に伝えるという方法である。この場合は他者に自分の思いや感情をただ話すだけでなく、和歌を詠む、物語を書くなどといった方法を用いて表現することも含まれる。

つまり、感情を外に向かって表出させることで、人は心を「晴らす」ことができる。心を晴らすことができたとき、人は満足し心の負担が軽くなる状態になると考えられる。

これを「美しい月を見て感動し、そのことについて和歌を詠む」という行為に則して説明すると以下ようになる。

まず、月を眺めたときに人は月の美しさというものに触れ、「もののあはれ」を知る。そしてそれによって心が動き、「美しい」という感情が人に生じる。これが宣長のいう実情から自然と生じる感情である。そして心が動いたことで生じた「美しい」という感情を、人は心の中だけにとどめておくことができない。この状態を宣長は「もののあはれに堪えぬ」状態であるとし、このとき人は感情を表出させることで自身の心を満足させる。これが宣長のいう「心を晴らす」という行いである。そして、それに則して人は和歌を詠むと考えることができる。

(2) 和歌の表現と共感

人が心を晴らすとき、その感情が強く、きわめて物のあはれが深い場合は、感情をただ表出させ、発散するだけでは満足できず、心を完全に晴らすことはできない。この場合、人は他者に自分の思いを伝え、それによって自分の思いに共感し、わかってもらおうとする。このことについて宣長は以下のように述べている。

「いたりてあはれの深き時は、みづからよみ出でたるばかりにては、なほ心ゆかずあきたらねば、人に聞かせて慰むものなり。人のこれを聞きてあはれと思ふときに、いたく心の晴るるものなり。これまた自然のことなり。たとへば今人せちに思ひて、心の中にこめ忍びがたきことあらむに、そのことをひとり言につぶつぶといひ続けても、心の晴れせぬものなれば、それを人に語り聞かすれば、やや心の晴るるものなり。さてその聞く人もげにと思ひてあはれがれば、いよいよこなたの心は晴るるものなり。さればすべて心に深く感ずることは人にいひ聞か

せではやみがたきものなり。」(『石上(一)』p.312)

このように、人は物のあはれが深い場合、他者からの共感を求める情の動きが生じ、「他者に自分の気持ちを伝えたい、理解してほしい」という思いが生じる。このとき、他者に対して自分の感情を表現することで、多少は心が晴れ、満足することができる。さらに、それについて受け手がその感情を理解し、「あはれがる」こと、つまり共感することで、さらに人は心を晴らし、満足することができる。

和歌を詠む場合、他者からの共感を得るためには、実情から生じた思いだけではなく、それを伝えるための表現の技術があわせて必要であると宣長は考えていることが、以下の部分からも読み取ることができる。

「いかに情がふかきとて、悲しかりけりかなしかりけりなどいひて、鬼神は感ずまじ。深心なる心情より出でて、其歌しかも美ければ、をのづから感応もあるべし。又詞のみいかほど優美なりとも、情のなきも感応はあらじ。情意ふかく、歌さまうるはしきときは、聞く人もをのづから感心し、天地をも動かし、鬼神も感応すべし。」(『排蘆』p.20)

「さていひ聞かせたりとて、人にも我にも何の益もあらねども、いはではやみがたきは自然のことにして、歌もこの心ばへあるものなれば、人に聞かすところ、もつとも歌の本義にして、仮令のことにあらず。」(『石上』p.312)

「歌といふ物は、人の聞きてあはれと思ふところが大事なれば、その詞に文をなし、声ほどよく長めてうたふが、歌の本然にして、神代よりしかあることなり。これを聞く人感と思へば、こなたの心も晴ることよなし。聞く人あはれと思はざれば、こなたの心のぶること少なし。これ自然のことなり。今世の中にあることに引き当てて心得べし。心に余ることを人にいひ聞かせても、その人あはれと思はざれば、何のかひなし。あはれと聞かるればこそ、心は慰むわざなれ。されば歌は人の聞きて感と思ふところが緊要なり。」(『石上』p.313-314)

和歌はそこに込められた思いを他者にわかってもらい、共感されることで、初めて「心を晴らす」という目的を果たすことができると宣長は考えている。和歌を詠むとき、まず前提として実情から生じた思いを伝えることが重要であるが、いくらその思いが強いものであってもただ単に「嬉しい」、「悲しい」という言葉だけでは他者にはその思いを理解できない。したがって、他者からその思いを理解され、共感を得るためには表現の工夫があわせて必要であると宣長は主張している。そして、実情から自然と生じた思いの強さと、和歌の表現の素晴らしさの2つによって、他者の共感・感動も比例して強くなると宣長は考えている。つまり、宣長の主張する、他者から共感を得ることのできる良い和歌というのは思いの強さと詞の美しさとの両方を兼ね備えている作品であると考えられる。

3．おわりに

これまで、宣長の考える和歌のありかたと、「いつはりの歌」との違い、そして和歌と共感との関係について、宣長の主張を考察してきた。宣長は和歌が実情から自然と生まれたもの、つまり自分の思いを偽ることなく和歌を詠むことが大切であると主張している。そして、人がありのままの思いを率直な言葉ではなく、より良い和歌にするために表現を工夫することも、他者の共感を得るためには必要であるから、詞をえらび表現を装飾しようとする行いも「より良い和歌を詠もう」という素直な思いによるものである。したがって「和歌は実情によってのみ詠まれるものである」と解釈している。ここで気になるのが、「いつはりの歌」にも同じように「よい歌を詠みたい」という思いが少なからずとも含まれているのではないかという点である。確かに題目ありきで詠むという点では、実情から生じたありのままの感情を詠んでいるというわけではない。しかし、そうであっても作品として和歌を詠む以上は「良い和歌を詠みたい」という思いは生じると考えられる。もしそうであるとすれば、1章（1）で述べた宣長の考える和歌のあり方には特に反してはいないように感じられる。しかし、やはり実情による心の動きと和歌との関係を考えると、「もののあはれ」を知ることから生じる自然な感情があり、その感情を晴らすために和歌が存在していることになるので、その役目を果たさない作品という意味では1章（2）で紹介した詠みかたの場合は「いつはりの歌」と分類されることがもできる。このような問題を解消するには、実情を基本とする和歌のありかたと文学作品としての和歌のありかたとの関わりをさらに考察する必要があると思われる。

参考文献

- ・『排蘆小船・石上私淑言—宣長「物のあはれ」歌論—』

本居宣長著、子安宣邦校注、岩波書店、2003

- ・『新潮日本古典集成（第六〇回） 本居宣長集』

日野龍夫校注、新潮社、1983